

○主催者あいさつ

■三遠南信地域連携ビジョン推進会議会長

浜松市長 鈴木康友



皆様、こんにちは。改めまして第19回となります三遠南信サミット2011 in遠州にお越しをいただきまして本当にありがとうございます。三遠南信地域の県、市町村等の自治体関係者の皆様、議会関係の皆様、そして経済団体の皆様、市民及び市民団体の皆様、多くの関係の皆様にお越しをいただき、また、国からもご来賓として多くの皆様に参加をしていただいております。改めて厚く御礼を申し上げますとともに、開催市の市長として心から歓迎を申し上げたいと思います。

昨年は飯田市でサミットが行われまして、あれから1年が経つわけでございますけれども、この間、今年1年は私どもにとっても非常にいろいろな大きな変化のあった年でございます。

まずは3月11日に東日本大震災が起りまして、あれから7か月が経つわけでございますけれども、本当に多くの皆様が犠牲になられまして、まだまだ復興に向けて本格的な緒についたという状況ではございません。亡くなられた皆様に改めて心からご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災地の一日も早い復興を祈念するものであり

ます。

それぞれの自治体の皆様も被災地の復旧支援、あるいは復興支援にご尽力をいただいていると思います。これからも長いスパンで被災地復興を考えていかなければいけないということで、我々に課せられた役割も非常に大きいと思います。

また一方で、私たちにとって防災について改めて大きく考えさせられる震災であったと思います。特にあれだけの大災害が起こったときには広域で連携をしていくこと、そしてお互いに助け合うことがとても大事だということを改めて認識をさせられました。この三遠南信地域の連携の中でも防災について取り組みをしているわけでありますけれども、一層の強化というものが必要だということを思いました。

また、福島原発事故以来、広範囲に放射能汚染が広がって、これまで日本の基幹エネルギー、原子力を中心にして進めてきたわけでありまして、今大きく世論も変わりつつあるという中で、これからはもちろん国のエネルギー政策をどうしていくかということは、一義的には国の責任においてやっていくわけでありまして、私たち自治体にとってはその中で今後の将来を見通したときには、再生可能エネルギーの啓発・普及というものが大きな課題になってきているなど、こうした面においても私たちの連携というものがより一層必要になってくるのではないかなと思います。

また、この1年のこの地域の社会資本整備について振り返ってみますと、5月にはリニア中央新幹線のルートが正式に決まりました。南信州の皆様もいろいろと思いはあったかと思いますが、これで本格

的な事業の推進に向けて大きなスタートが切られたかなという感じがいたします。

また、8月には、新東名が来年の初夏までには静岡県内が全線開通、供用開始されるという発表もされました。これもこの地域にとっては朗報であろうと思います。

また、懸案の三遠南信自動車道でございますけれども、なかなか私たちが思うとおりには進んでいないわけでありましてけれども、それでもこの年度内にはいよいよ三遠道路の一部供用開始も行われるということで、我々も大いに期待をしているところでございます。これからも一層、早期全線供用開始に向けまして一致団結して推進をしてみたいと思います。

また、愛知県では、私も大変仲がいいわけでありまして、大村新知事が就任いたしましたして、東三河県庁という新しい構想を打ち上げまして、年内には議会に提案をされるということで、これは東三河地域にとっては大きな変化であったんではないかなと思います。

こうしてこの1年を振り返ってみますと、この三遠南信地域を取り巻くさまざまな環境変化がございました。こうしたものを受けて、今回の第19回となりましたサミットを行うわけでございますけれども、今回のテーマは「三遠南信流域都市圏構築への挑戦 ～融合、新たなステージへ～」ということになっております。

皆さん既にご案内のとおり、この会も19回、回を重ねてきたわけでございますけれども、一昨年の豊橋のサミットにおきまして「連携から融合へ」という決議をいたしまして、新たなステージに向けての取り組みがスタートをいたしました。20年3月には三遠南信地域連携ビジョンができて、同年11月には浜松市役所の中にS E N Aの事務局が開設をされまして、今、具体的に事業の推進に取り組んでいるわけござい

ますけれども、この連携ビジョンも4年を一区切りとして考えておりますので、24年が一つの節目になってまいります。

そういう意味で、24年からの第2期に向けまして、1期目の検証と総括をしていかなければいけない。そしてまた2期目に向けての取り組みをしていくと。そしてまた三遠南信地域の連携のあり方についても、新しい連携の仕組みについていよいよその取り組みをしていくと、そういう時期に差しかかっていると思います。

そうした中で、今日は元国土交通事務次官でございます、現在、芝浦工業大学大学院の教授をされておられます谷口博昭先生にご講演をいただくことになっております。谷口先生についてはよくご存じの方もたくさんいらっしゃると思います。私も国土交通省時代は何度となく三遠南信の推進に向けて陳情やお願いに伺ったわけでございます。先生は特にこの地域については熟知をされておられて、三遠南信自動車道についても専門家でいらっしゃいますので、きょうは三遠南信の新しいステージに向けてということで、先生のさまざまなこれまでの蓄積でありますとか知見も踏まえて、我々にいろんな示唆をいただけたと思います。

そうした先生のご示唆もいただきながら、この後、分科会が行われますので、それぞれの皆さんのお立場からさまざまなご意見やご提言をいただきまして、次のステージに向けて大いに参考にさせていただきたいなと思っております。

また、今回から新たに伊那市さんがオブザーバーとしてご参加をいただくことになりました。昨年の駒ヶ根市さんに続いて新たな仲間を迎えることができたということで、我々にとっても大変頼もしい限りでございます。

こうした三遠南信地域の取り組みにつき

ましては、私が言うまでもなく、今全国をリードする県境連携として注目をされているわけでございます。国においても三遠南信地域についてはとてもご注目をいただいているということで、いろんな取り組みの申請をしても、おおむね好意を持って見ていただいていると。これは私の希望も込めてでございますけれども、これまでの広域地方計画の採択等も含めまして、いろいろ国にもご支援をいただいているところでございます。

これからいよいよ日本が地方分権に向けて大きく進んでいかなければいけない。これまでの行政の境というものがだんだん意味をなさない時代になってきているのではないかと私は思います。そうした中で、道州制への移行等々、新たな広域自治体の取り組みについてもいろいろな議論があるわけでございますけれども、我々はそうした将来の大きなビジョンに対しても具体的な県境連携の一つの事例として、今後大いに全国に向けて発信をしていかなければいけないと考えます。足元を見つめながら、お互いに助け合うという、そうした地道な事業の推進とともに、将来の大きなビジョンをめがけて、我々がまさに日本をリードしていくんだと。そういう意気込みでもって、この県境を越えた広域連携を推進していければなと思います。

ぜひ皆様の引き続きのご理解とご尽力をお願い申し上げますとともに、今回の19回のこのサミットが実り多きサミットになりますことを心からご期待を申し上げまして、ごあいさつにかえさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

■三遠南信地域連携ビジョン推進会議副会長 浜松商工会議所会頭 御室健一郎



改めまして、皆さん、こんにちは。浜松商工会議所会頭の御室でございます。一言ごあいさつを申し上げたいと思います。

三遠南信地域の市町村行政の皆様並びに日ごろから地域おこし、あるいは文化活動に取り組んでいらっしゃる住民の皆様、そして商工会、商工会議所を始め、経済団体の皆様には大変ご遠方より、そしてまたご多忙のところ、当浜松地域にご参集をいただきまして、地域経済界の総意をもちまして歓迎を申し上げます。

また、平素から三遠南信地域の振興につきましては、格段のご高配をいただいておりますこと、ご来賓の皆様にもご多用の中を多数ご列席を賜りましたこと、厚く御礼を申し上げます。

2週間ほど前になりますが、10月6日、7日の2日間、このアクトシティを会場に、全国商工会議所連合会の女性会全国大会という会合がございました。今回はそれに引き続いての大きなコンベンションでございます。私、この会場でごあいさつさせていただくのは今月で2回目ということでございます。ちなみに、女性会の全国大会では会場の外に地場製品の販売ブースが並んでおりまして、参加者の皆さん、もちろんすべて女性の皆さんというわけでございますが、競うようにしてお買い物を楽しまれ、どのお店もまさに飛ぶような売れ行きだっ

たということでございます。

東日本大震災、あるいは原発不安、超円高、ギリシャ危機など、七重苦、八重苦の日本経済、大変な状況に今さらされているわけですが、こうした事例を目にいたしますと、決して女性の世界だから例外であるというわけではございませんで、消費のきっかけや活発なムードをつくり出していくことが経済を元気にする上でとても大切な要素だということを痛感いたしました。三遠南信サミットは、こうして大勢の関係者が一堂に会し、活発に意見交換を行い、そしてお互いの地域の将来像を語り合うという、すばらしい場でございます。ぜひとも経済活性化という観点からも、アイデアや情報を共有し合い、皆様とともに閉塞感や沈滞ムードを振り払っていただく貴重な機会となれば幸いに存じます。

ご案内のとおり、本サミットは回を重ねて19回目の開催となるわけですが、私も早いもので会頭になりまして5回目の出席ということになります。この4年の間に三遠南信地域連携ビジョンが策定をされ、それに基づき、各地域が県境を越えて産学官民の幅広い分野における広域的な交流、連携活動を推進し、自発的な地域づくりや圏域の形成が図られてまいりました。

我々商工会議所では、中小・零細企業が抱える問題に真摯に向き合い、経済団体としての責務を果たし、それぞれの地域の継続的な発展に寄与すべく諸事業を展開しておりますが、加えて産業基盤の骨格をなすインフラとして、三遠南信自動車道の一日も早い全線開通が何より大きな経済効果をもたらすものと確信をし、関係先への要望を初め、地域へのPRなど地道な活動を続けていところでございます。既に北方面では、飯田山本から天竜峡、そして喬木村から程野間にて部分供用が始まり、南方面においては来年、引佐町から旧鳳来町間の

供用開始が予定されるなど、こうした活動が着実にその整備に結びついているということございまして、関係各位にはこの場をおかりしまして深く感謝を申し上げます。

また、三遠南信自動車道につながる浜松三ヶ日・豊橋道路につきましても、期成同盟会が中心となりまして各方面の働きかけを行っておりまして、その進展にも大いに期待を寄せるところでございます。

ただ、今後より一層の地域連携を強化していくには、連携ビジョンにうたわれた重点プロジェクトのみならず、それぞれの各組織が自発的な事業展開を通じて具体的な活動に移していくことがより肝要になるものと思います。

継続は力なりと申しますが、既に18回のサミットを通じて、皆様それぞれに各種情報やアイデアを十分に蓄積されていらっしゃるものと存じます。どうぞ本サミットにおきましては、そうした皆様がお持ちの有益・有効な資源をフルに活用いただく場となって、さらに3地域の相乗効果を生み出して、三遠南信地域が新たなステージへとステップアップする契機となりますこと、心より祈念を申し上げまして、簡単ですがごあいさつとさせていただきます。どうもありがとうございました。

○来賓祝辞

■国土交通省中部地方整備局長 足立敏之 様



ご紹介をいただきました国土交通省中部地方整備局長の足立でございます。本日は第19回の三遠南信サミット2011 in遠州がこのように盛大に開催されますことを心からお祝い申し上げます。

また、日ごろから鈴木市長様を始め、この3地域の市町村長様方、あるいは県の皆様に、国土交通行政の推進に当たりまして非常にお世話になっておりますことを、この場をおかりしまして厚く御礼申し上げます。

また、本日、基調講演をいただく谷口元事務次官は近畿地方整備局の局長をされており、当時、私が企画部長として、直属の部下だったこともあって、みっちり鍛えられました。さらに申し上げますと、和歌山の県立桐蔭高校の6年先輩でもあります。わざわざ中部管内に足を運んでいただきまして、心から御礼申し上げたいと思います。

鈴木市長様からもお話がございましたけれども、3月11日に東日本大震災が発生しました。現在も東北地方を中心に復旧・復興の努力が続けられており、被災地の一日も早い復旧・復興を心からお祈り申し上げます。

私も現地のほうに参りまして、被災地を見せていただきました。私自身は土木の技術者でございますので、そういう観点で物を見てまいりましたけれども、やはり信頼できる道路のネットワーク、これをちゃんとあらかじめつくっておくことが大事だというふうに痛感いたしました。

それから、津波のやってくるエリア内、このエリア内の物のつくり方というのは、やはりもう少し工夫が必要だったな、あるいは重要な構造物の配置についても、もう少し配慮が必要だったな、そういうところを痛感いたしました。

東北地方の復旧・復興に当たりましては、くしの歯作戦と東北では呼ばれております

けれども、東北の中央を縦貫する東北自動車道、国道4号、これを軸にして東西に、特に津波で被災した三陸沿岸、そして福島の浜通り、こちらのほうに進入していく道路を緊急輸送路として15ルート確保したと聞いております。このくしの歯を完成させて、地域の緊急輸送路として活用していただき、自衛隊や消防、警察の方々が活動したり、支援物資が入ったり、そういう緊急対応を達成いたしました。先ほども申し上げましたけれども、やはり信頼できる、規格の高い道路のネットワークをあらかじめつくっておくことが大事だというふうに痛感したわけでございます。

翻ってこの地域を見ますと、東海・東南海・南海地震が目の前の脅威として迫っております。今後30年に発生する確率が、東海地震で87%と言われております。東日本大震災に匹敵する大きな地震であったと言われていた貞観地震、869年だったと思えますけれども、この地震の18年後に仁和の3連動地震といいまして、この地域の東海・東南海・南海地震、これに相当する地震が発生しています。貞観地震から18年後です。したがって、東海・東南海・南海地震を抱えておりますこの地域としても、本当に待ったなしの状態に来ているのではないかと感じております。

そういう観点で、先ほども申し上げました信頼できる道路ネットワークというのをあらかじめつくっておくという観点が大事だと思ったわけでございますが、この地域ではまだまだつながっていないミッシングリンクもございます。こういったところの整備をとにかく急いで、本当に次の3連動地震が来る前までに何とかそれをつなげる必要があるのではないかと感じておるところでございます。

午前中、現地を見させていただきまして、三遠南信の引佐北から鳳来の間を走ってま

いりました。かなりできておまして、インターの入り口のところはまだでございましたけれども、中のほうはかなり整備が進んでおりました。また、新東名のほうもあわせて見させていただきました。引佐ジャンクションのところから浜北のサービスエリアまで見させていただきましたが、かなり整備が進んできております。これを見て、私は、安心をしてきたところでありました。ただ、とにかく一日も早くそういったものを開通させるというのが我々の使命でございますので、地域の皆様の期待にこたえながら、しっかり取り組んでまいりたいと思っております。

最後になりましたけれども、3地域の今後のますますの発展、そして、より安全・安心な地域になりますことを祈念申し上げまして、私のごあいさつとさせていただきます。

ありがとうございました。

■ 経済産業省関東経済産業局地域経済部長 増田仁 様



皆様、こんにちは。ただいまご紹介いただきました経済産業省関東経済産業局地域経済部長を拝命いたしております増田仁でございます。本日、私ども局長、照井、所用のため、私が本日この場にお招きいただきましたお礼と感謝の気持ちを込めて一言あいさつを申し上げたいと思っております。

今、私どもの国は停滞の中の危機と言わ

れております。20年にわたる経済成長、非常に苦しい状況の中で、3月11日、東日本大震災がございました。目下のところ復旧・復興ということで全力を尽くしております。その中でも特に今後エネルギー対策、それから特にものづくりに影響がございまずサプライチェーンの強化ということが喫緊の課題でございます。こうした中でも国全体、地域を初め、現在産業空洞化、それから成長力の強化・育成、こういったことが非常に重要だと認識をされております。

ちょうど先週、10月21日、金曜日でございますけれども、今申し上げたような手当て・方針を国としても最大限支援をする、牽引をしていくということで、第3次補正予算、概算の閣議決定をさせていただいたところでございます。まずは被災地が元気になること、非常に重要でございます。きょうこの場をかりて、この三遠南信の皆様からもぜひ東日本大震災、今、復旧・復興をしようとしているそういった地域に対するさまざまな面でのご支援、ご協力をよろしくお願いいたしたいと思っております。

さて、今回のサミットでございます。こうした県境を越えた取り組み、私ども経済産業省、地方の経済産業局といたしましても非常に重要視しております。例えば企業立地促進法、既にこの地域は全国に先駆けて広域基本計画を策定いただいております。また、個別の施策といたしましては、農商工連携、地域資源、JAPANブランド、そういった地域を、点と点を結ぶ、さらにはそういった点と点を結んだ線から面へという取り組みを、まさに県境を越えて率先をしてやっただいている地域と認識をしております。

私どもといたしましても、ちょうどこの地は、きょう私はさいたま市のオフィスから来ております関東経済産業局、それからさらにあわせて本日は中部経済産業局、名

古屋からも参っております。その他、地方支分部局、東海であったり中部であったり関東、そういったところにまたがります。ただし、これまで私の認識では皆様方はその両方にまたがるということ、これはハンディではなくて長所としてご活用いただいていると思います。私ども国の立場といたしましては、三遠南信のご地元からごらんになって、国を徹底的に使い倒す。そういった意味でぜひ使い勝手のいいところにどんどんご相談をいただければありがたいと思っております。

この三遠南信の地が日本の真ん中から世界の真ん中へ、しっかりと地固めができる、世界最高の産業、そういったプレーヤーが集う、その世界最高の場、こういったことをぜひ提供いただけるよう、私ども各府省連携をして支援をしてまいりたいと思っております。

結びに、本日この場をご提供いただくに当たって大変ご尽力をいただきました鈴木康友浜松市長様、それからしっかりとサポートをいただいております浜松商工会議所、御室会頭様、心から敬意を表したいと思っております。本日ご参集の皆様方、それからこの三遠南信地域のますますのご発展を祈念して、私からのお礼とお祝いのあいさつとさせていただきたいと思っております。本日は本当におめでとうございました。

■ 静岡県副知事 大村慎一様



皆様、こんにちは。このあいさつのトリを務めさせていただきます静岡県副知事の大村と申します。本日は静岡県、そして浜松市によろこそおいでをいただきました。心から歓迎を申し上げます。

さて、前にもお話がございましたように、今年は東日本大震災が発生しました。東海地震、3連動地震、こういったリスクを抱える本県といたしまして、今回の大震災は、決して人ごとではございません。我々は県民のこうした声を背景として、その思いを胸に各地での支援をさせていただいております。特に岩手県の内陸部に位置します遠野市に現地支援調整本部を置かせていただきまして、そこを拠点に沿岸部の大槌町、山田町を3月19日以来、継続的に半年間にわたって支援をさせていただいております。県としまして、県と市の職員だけでも700人を超えるメンバーを送りまして、またボランティアも合わせて、支援をさせていただいたわけでございます。

今回の震災は、津波被害でありますので、内陸部が沿岸部を支援するという形になりました。特にこの岩手県遠野市は、従来歴史的にも交通の結節点であり、それを生かして内陸部と沿岸部を結ぶ非常に長大な、立派なトンネルを長年かけて整備をしてこられました。その基盤と防災に対する非常に高い意識が今回の震災の支援で非常に功を奏したと思っております。

この三遠南信地域は、今までもご説明がありましたように、新東名高速道路、三遠南信道路、リニア中央新幹線の間駅、いずれも内陸部に位置し、また内陸部と沿岸部を結ぶという新たな発展の交通基盤であります。

これまで我が国の経済成長というものは沿岸部に大規模な工場が立地をし、そして人口集積があり、そういった中で沿岸部が主に牽引をしてきたという点があると思

ます。しかし、大量生産という点では新興国に既に優位性があります。また、我が国が競争性を維持していくべき高度な知識集約型の産業というものは、相当に立地の特異性が違いますし、また、情報化・IT化の進展という中で、内陸部も含めた立地の制約等、今後相当変わってくると思います。そういう意味では、これまでの10年以上にわたるこういった日本の閉塞感というものを打ち破る新たなモデルというものが、この東日本大震災を契機として、内陸部に潜んでいると考えております。

特にこの三遠南信地域は、これまで19回にわたって、来年は20回ですから、非常に広域的な連携に他を圧倒する歴史がございます。沿岸部に浜松市を始め、日本を代表する産業集積があり、そしてこれまでの発展基盤を内陸に大きく持っております。大きな優位性がございます。そういう意味で、この三遠南信地域が今後の日本の新たな発展の基盤のモデルとなる、十分その余地があると期待をいたしております。

県といたしましても、来年の初夏、実際は春と期待しておりますが、新東名高速道路の県内162kmの区間が一括して開通をいたします。これを機に、県としては内陸にフロンティアありということで、さまざまな取り組みを進め、沿岸部との連携を図っていきたいと考えております。

もう一つ、地域分権でありますけれども、昨今は道州制、そして広域連合といった、非常にダイナミックな議論が出てきております。これは大変に歓迎すべきことであると思っております。また、その一方で、形にとらわれますと個々の権限移譲ですとか地域のきめ細かな連携というものが、なおざりになる危険性もございます。

この三遠南信地域は、何といたっても県境をまたいだ連携ということに大きな特徴がございます。住民の皆様にとっては、県の

単位ですとか、市の単位ですとか、そういった行政単位、区域というものは余り関係はございません。そういう意味で、これまで進めてこられた、そういった県境を越えた連携というものをより充実していただくということも一方で非常に重要ではないかと思っております。

今回の震災も踏まえれば、先ほど冒頭鈴木市長からもありましたように、防災の連携ということも非常に効果があるのではないかと考えております。三遠南信地域を合わせた防災の合同訓練などをやっていただいて、岩手県ではありませんけれども、内陸部と沿岸部との支援の連携といったことも非常に大きな意義があると感じているところでございます。

いずれにいたしましても、この三遠南信地域は、歴史もあり、伝統もあり、そしてこれだけのサミット、来年には20回になる大きな連携の伝統がございます。この特色ある地域の発展に大いに期待をいたしまして、私からの御礼のごあいさつとさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。